

松時 猪名院

南總里見八犬傳第七輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第六十四回

現八單身のみ衆悪と戦ふ
縁連牙二郎信道を逐ふ

却説赤岩二角ハ縁連を首とて大約五名の塾生ホの僉現八ハ撃伏
 ら且一を媚と恚る氣色を又現八を欺待ま程ハ夜ハ多々深初と
 既ハ人定ぬるハ客も亦下由酔ぬる。その中ハ現八ハ素と酒量ハ
 多。之とて、（酒量）不血を推辞ハけ且ハ二角中多々その意ハ任と童扈從と呼
 ちつハ盃盤を納とて又如此々と分付とて果と退きの客房ハ屏風
 建達ら。現八ハ臥蓆を儲と云云と報一ハ二角とをもち安と。犬飼ハ
 こそ疲勞多ハけと退りて睡リ更籠山生家族ハ同下牙二郎が子舎ハ



摠蒐さうくふと撃うつ死しつと向むかを二角にかく使つかめむ閑暇くわんげ無事むじの時ときさうが寝首ねくびを
 捕とらるゝものありぬ渠みちの今いま大敵たいてきの中なかあり。いそぐ熟睡じゆくをま死し又また火事かじわさ
 呼よらぬその声こゑ鄰となりへ使つかえさる四鄰よんりんの人々ひと走聚しゆくあま妨まふるゝものありべし。所詮ところ五人ごにんの
 十人じゆにんも三四隔さんしよくの捕とらるゝ盗賊たうてきの入りぬと呼懸よびかるゝ起おきとまを撃うつてまをけり。然しかん
 わらむやと誇こぶる左ひだり右みぎを佐たすけと見えぬ衆しゆ皆みな齊いっせい一感いつかん服ふくし。その中なか縁ゆかり連つらむ
 うち合あひつ声こゑと潜ひそめり仰あやまし理ことり。某たれが腹はら心の若わか黨たう不ふ尾び江内えいといふ
 のあり又また奴隷やつの墓はか内うちといふものあり。西にし入い俱くの心こゝろ悍はげしく。所ところ行ゆく歡よろこべり。是こゝろ回かへり
 供ため將しやうと来き。渠みちの渠みちホと加勢かぜいのまをへり。かま身み方かた八やち入いり。現げん八やち月げつも武ぶ
 勇ゆう小瀬せと三さん面めん六臂りくひのりぬとも撃うつ漏ろうをまをるべし。ゆゑに彼か奴やつと擊うつ捕とらるゝ。
 首級くびを某たれ小使せり。白井しやくせいの城しろへ齋いへて主君しゆきん長尾ながび殿どのにおまをさす。道みち中ちゆうの某たれの
 驛えきゆゑ強偷きやうとう数人すうにんうち入り。御ご大たい刀とうを奪うばひて走り。其その志こゝろを追おひ蒐くる。

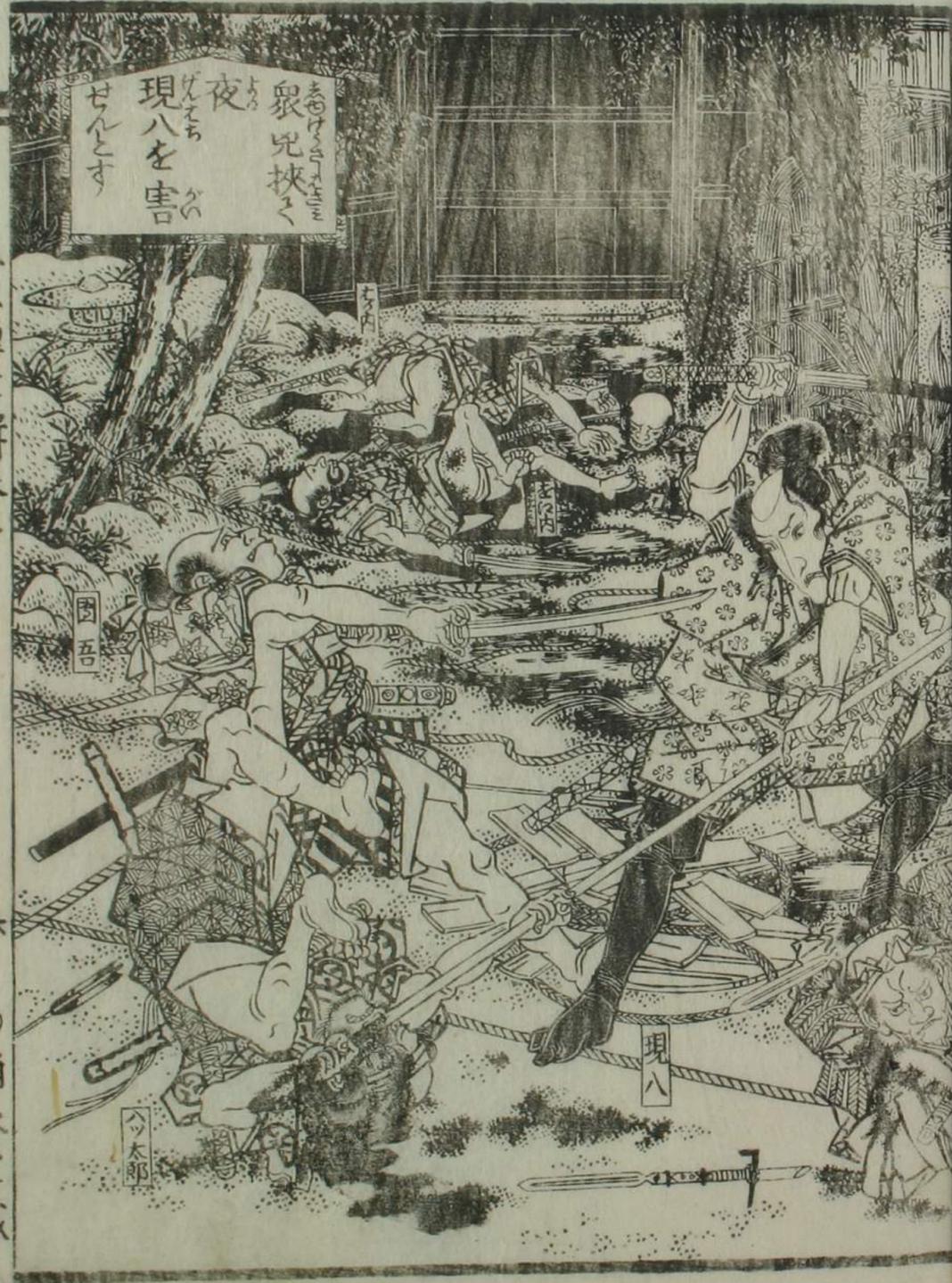
頭かぶ立たる人ひとを矢庭やにわの撃うつ函はこ外ほかども先まに逃にげ亡なす。ふらび追おへる。遂つひに及およぶを
 既すでに御ご大たい刀とうを失うはひて。解とく死しすののけしと縛むす相違さうゐひ死し證あかしを。賊てきの首くび
 級ぐいを齋いへり。とやえわび奉ほうら。縦たて罪科ざいと被おはるゝも五十日いそひ休やすみで許ゆるさるべし。
 この議ぎいふ。と長ながけが衆しゆ皆みな亦また復また感佩かんぱいし。籠山かごやまの說せつ得とくく妙めうえ。介けら左ひだりけん
 右みぎせと。送くわふ其その手配てはいの商量しやうりやう小夜せや深ふかみ。有あ然ぜん程ほど小犬こいぬ飼現かひげん八やち客房きやくばうの
 赴おもむき。既すでに臥ふ草くさみ。の肚はら裡うちに。さうも赤岩あか二角にかくの頼たの切きる。弟子でし子こホの
 遺をる。且また不ふ撃うつ伏ふせられ。聊いさ怒どる氣色きしきも。いふ。口くちを款待くわんたいする。その奸詐けんせつ
 測はかるべし。且また渠みちが左ひだりの眼まなこの矢傷やがた。昨宵きのう庚申かうしん山やまゆて平ひらく。これ射いられ。童蒙どうもうの
 射やを教おしへる。不ふ憶おぼへ。箭やの飛とび。て眼まなこを傷やむ。ま。その本性ほんしやうを。事ことの
 也なり。所ところ以ゆの食言じきげん。さ。折をり。彼か奴やつの。これ認まね。仇あだを
 子こを知らぬ。昨宵きのう真まの二角にかくの冤鬼ゑんきの告つぐる。是こゝろ是こゝろ彼か共とも吻くち合あはせ。亦また

何を疑ふに死るほより謀りて便宜を窺ひ老妖怪を退治して赤岩大村親
 子の為ぬこの年来の冤を釋せし許諾一夏もその甲斐なり。さかき来ぬ羽翼
 且角太郎の孝心篤く彼妖怪を妖怪と知らず真の親と相譚敵
 とす難き。いふに死と吐ぬ向ひ腹の答て左の右の心からぬ旅宿の床に目睡
 せを存りけるを夜にさうさう深く深く随ふ頻に睡眠を催せたるは睡らんと
 程の目睡を起取するぬの身を放さぬ護身褌の中より彼信の字の瑞玉の
 碎る如き音せし敬馬三覺と眼を用ひ枕邊の行燈の火を滅果と黒白を
 護身褌を表より撈る玉の碎けどるる原來夢をゆける秋と心ぬ
 宵のうら騷び心ゆり安らむ臥しけり尋思をさるぬ縁連赤が執念深く
 恨る今宵竊ぬ害せんと謀るよととる身ぬ縁玉の眞然と音と眠りを
 覺せ秋のゆき物を思ふより密と立出きて身と衣を襲ふ縁頬の

障子を開るぬ怪むべ障子の外方の物言ひ並に累ねさうと走り出んとする
 又跌せんと操組のうら騷ぶぬ此も騷ぶぬ徐く臥尊ぬゆて袂
 包を腰ぬ著け大小の両刀を帯ぬ帯り檢撈々々又縁頬のうら騷ぬ措きのを
 一箇箇音せぬやうに片よき出ると兩戸ぬ閉鎖ありこれを杖竊ぬ外へ遂ぬ
 前裁ぬ出ぬぬぬぬぬ足と捉せぬ為ぬ麻索を引渡して甲夜ぬ天の結陰
 一目今僅ぬ露るを刀を八日の月ハ役一と星光の現ぬ現八聊便りを
 得る件の索をうら騷ぬは彼此と見遠るぬ南のうら騷ぬ板垣ぬ一枚の引戸をぬ
 せ。細小る門のうら騷ぬと究竟と鎖探捨て密と閑閑を試るぬ戸走り轉る
 ともものこ手懸可閑措く又縁頬立戻り障子引ぬ夥の物を舊の似ぬ
 倚る。外ぬと雨戸こえやを閑つ庭面る足場を掃る樹柱の蔭ぬ身を
 潜るぬ現ハ今宵の舉動と後ぬぬの舌を振るぬ身の中ぬ臆

あり。といふ所ののえりまを。有如之程の刃の鐘鐺々と響くと暗翳の潜び近
 つく八箇の瘴者奥のさす牙二郎飛伴太西のさす次の間より東太團五
 濩太郎外面の縁連主従尾江内墓内さす三人兩戸の添ふ埋伏し入
 三隊の立別と出口々々を殺塞ぎて競ひ蒐る諸声高く盜賊のぬき撃
 ちよ。叫びも果て西方齊一隔の紙戸を蹴放ちて閃く短鎗の刃頭も横の
 上よりと刺さ各々竄ひ違ねども手奮むせむも。原來甲夜の計較を
 たく猪と逃るる遠く追蒐をそ送ぬ叫びの罵りの兇後とど
 打擲るる縁頬より突んとさす。豫そ身方の倚り措く小桶播盆白火
 盆の跌き倒とく手ぬ持てる刃の面を劈且人の短鎗と蹂躪も同士撃手はを
 叫ぶの早ぬ起も得さけり。登時外面の後詰をさす縁連の敬馬さす。且
 縁頬へ登り来り狼狽騒ぐの共を頻り罵り鎮むる程の船虫のこの物音も

紙燭を秉て走り来り。現八を逃とせ。望を失ふのうら。然
 とると思ひかへて。臥簞へ手首をさし。莞尔と立ち大々々をさす
 試みぬ。夜衣も蒲團も温まり。耗ね脱出。尚程のあつとを裁龍の隈をぬ
 躲とさるも知るべからず。獵出ぬ。急ぐ報る高声を兩戸のあるさ
 停立る尾江内墓内らちせ。遠足飛して墓直ぬ。走遶る庭
 渡さ。麻索も兩人齊一足を捕ら。齊一撲地と轉輾へ現八得。と頭れ出
 起んとさる墓内。細頸丁と撃手落せ。尾江内怕敬馬さ。身を起し。声あり
 立ち。偷見のこぬ在り。来て撃手笛のむと呼せも果て現八をさ。血刀さ
 振る。走り蒐る尾江内も脱と。と思ひえ。技合。刃の電光兩三合撃
 よと見え。尾江内の肩先より。乳の下うけ。韓竹削ぬ。砍倒さ。樹下陰鮮血の
 丹楓を散けり。程のあつ。牙二郎飛伴太東太團五と濩太郎。或も短鎗打刀



八木傳七郎卷二

三
清原盛藏

応手物々々を引提うち振りたる現八を推捕籠り。撃んと競ふを物ともせざり。
 一勇士の大刀風向ふ前なる。是首小見る。彼首小隠す。一上一下と術を盡す。
 六口の刃八田毎の月の波のうねり小晃く如く何小暇る。死のから先小進こ。
 飛伴太ハ短鎗の蛭巻所落され。刀を抜んとする程小現八透さ。踏入て弦の
 尖骨を丁と砍る。刃の牙小飛伴太ハ苦と叫び倒さる。身方の上を踏越。頻り小
 進む。濃太郎三尺小近き。焼刀の稜うち鳴。奮撃突戦心。を予ハ猛く。既小
 巨瘡を負。入。足踏。腕も俱小素。敏。吐。息をつ。暇。流。の。の
 苔衣。隅より。大袈裟。砍ら。仰。反。倒。さ。り。牙。二。郎。東。太。團。吾。小。い。ち。ご
 深瘡を負。ぬ。も。既小身方。を。四。人。を。撃。し。て。初。の。勢。小。衰。へ。只。三。方。小。立。塞。ま。せ。
 頻り小加勢を呼ぶ。程小逸。東。太。縁。連。ハ。玄。関。小。掛。け。り。弓。箭。握。拿。安。房。小。
 縁。頼。小。立。頭。ま。ま。弦。音。高。く。射。か。る。征。登。前。を。現。八。小。刀。り。て。研。拂。ひ。砍。落。し。る。海

牙二郎オと挑争ふ。必死の血戦。此も怯ま。前後左右小當。ま。も。縁。頼。小。
 船虫が箭種を多く。拿りて。来。て。縁。連。を。資。し。射。出。せ。箭。声。小。委。ま。さ。か。り。
 差詰引詰り。切。く。發。せ。を。現。八。小。一。輩。最。茂。き。羅。漢。杉。を。盾。め。り。く。變。め。小。の。箭。を。
 禦。き。り。肚。裏。小。の。ふ。か。り。日。今。さ。ゆ。て。狗。髯。せ。小。庚。申。山。出。く。亡。魂。小。許。諾。し。る。も。
 その甲斐。ま。り。且。年。米。五。大。士。と。契。り。一。京。も。始。め。り。て。終。る。う。ん。ハ。丈。夫。小。あ。ら。む。下。
 へ。び。を。殺。脱。と。武。運。と。嘗。ま。小。増。と。と。あ。ら。う。と。深。念。と。考。大。刀。を。も。箭。を。も。受。
 流。一。砍。落。し。漸。々。小。遠。巡。り。て。彼。板。垣。の。小。門。を。引。戸。の。ほ。ろ。小。近。つ。死。と。左。の。手。
 頭。を。働。く。件。の。引。戸。を。逆。手。小。さ。り。て。忽。地。破。と。用。多。う。後。さ。る。小。走。上。出。く。ま。か。り。
 その戸を引閉る。ふ。外。面。小。大。き。る。葛。石。の。あり。く。血。刀。投。捨。雙。手。と。り。て。ま。ま。を。
 起。ま。か。の。石。を。引。戸。へ。楚。と。倚。み。ま。り。これ。め。ま。を。裡。面。さ。り。の。推。續。き。ま。追。ん。と。さ。る。小。
 推。せ。ま。り。引。け。る。戸。の。ひ。ろ。く。ま。り。何。の。つ。ま。と。焦。燥。の。も。縁。連。と。小。戸。口。小。取。交。さ。り。

ふらび打揮きうけり。有然程八も捨き刀をさう揚て血を押し撃ふ飲めく。
 走り去らんとする程八の天ふび曇りて其処もろろぞ野干玉の路いと暗く
 ろろかか岐道ヨキ外田の畔に投て往方を定めぬ。一ふ忽然と一團の陰火
 目前に燃出ゆ先立り現八を導くぞ隠々と閃きゆく程八現八と便を
 得て件の鬼燐を心當り返壁を投て走りけり。されば又牙二郎逸東太團
 吾東太ホも必ひけり小門を走り出する現八を透さば追んとあはれども
 外面よりと大きな石を倚り指と一ふ開んとするぬその戸動を迷送ふ罵り
 推重すまき戸尻に諸手を掛け諸声合て推と程八遂ぬその戸を推
 外と倒しかり。牙二郎の石も小髻を磨傷す。要時ハ起も得ずり。人
 命咄とち笑ふ向腹立ても今とふい争ん暇なけり。稍身を起し塵うち
 拂き。口は不續けといふ俣ぬ。名現八を追躰す縁連も亦後れどと走り

出する背後より。赤岩が若黨奴隷と麓山が従者小八船中が指揮ありて
 後走ぬ走りぬ。主の後方ぬ引添んと喘々ぞ追ふ程八團吾東太の面を
 尚片息する。濃太郎と飛伴太を肩ぬ引被て且客房まで退きける。かり。程八
 牙二郎縁連と共侶ぬ敵の往方を認めども足ぬ信して追ふ程八も幾十町を
 走りけん天のやうな明くる横雲の間よりとて前面遠眺し。現八を頻り
 走りて相距ると七八町誰が連城を照けん踏も迷が返壁を庵の中へ入り
 一ふ縁連見ぬ歡びも今ぬの庵へ走りけり。背影の疑ひも現八も極ま
 彼処何とぬ里中へ。菴主とありてと問ふ。牙二郎含笑。彼処大村の
 野盡処にて返壁と字せり。菴主の則と兄弟の南太郎ぬそあると。犬村ある里
 人ホが建る庵とせり。のぞき。一遍もゆたてぬ。と既ぬ彼処へ追籠て。袋の
 物を取り易かり。左の右せんといと高き相譚り。いよく歩をぞとあける。

有然程の返壁る角太郎の雛衣と共侶の現八がうをのまといふくといひ
 不樂その通宵寐も寝らず詰旦の未明の起る雛衣をいそぐ朝の炊の
 柴折焼くをくその還るを俟の僅の旭の出る比現八も喘々折戸推開け之り
 来る為体の膝く衣の鮮血の塗まら縹のけりと驚き立る夫婦も右
 よと左より犬飼のいふぞ彼女の安危心なる有けんよとゆふやりのいふ
 現八息咄あを赤岩の宿所を塾生們と試撃の趣且その怨を復えんを件の
 徒黨九八名盗賊入りぬと呼りて現八を撃んとするその縹の為体勝負の進退
 如此々と言語急く報知らせれある夫婦又驚き且感嘆しく已きりてを
 現八又報るや兵の寔の凶器の戦ひの間是非及ぶ某かの折入を斫
 伏せ又入の瘡を負う然も大人一角殿のその処出ぬと牙二郎の恙か
 又上毛白井の來客の麓山逸東太縁連といふの原是塾生なりといふ

主人も豫く相識るる彼人頻り矢を射るを某辛く防ぎ留め箇様
 箇様小謀りの竟の外脱と出る路を求る程天結降りてゆてを
 下る時一團の烽火燃出某を導きう天の明る比消失ぬこれらの由を
 報んと立りてゆい程も追人蒐りてこの菴中を鬧まし其身を
 今さう惜む足らぬ主人夫婦を連係せ後悔まとも及んや姑く餘毒を避て
 こそ又再會を料るべき暇さうまといひる立わがんとてける角太郎も
 雛衣も慌忙推禁めく何事といゆるやん刎頭の交りの眞愛樂禍福を
 俱ぬてせめや赤岩より追人蒐りて家捜せんと聞くと某かくあうん
 限の阿容々々としてと遽とさるや方便を盡してそがうゆる脱れらる俱ぬ死ん
 要るに言ひそと言語尖く怨む雛衣も亦慰めく俺們夫婦の為小そ
 赴きぬひ赤岩ゆきてを冤をのひるけれ萬死を出る生を保ちてより

来りしを又何処へ遣はるべし。さあのかくゆもこそ所天のひはるより任し
 定と夫婦齊一禁むと現八口管感嘆と七余り主人のあり。さあ追人を
 俟ぬと向を角太郎変ぬと我間のあらぬ草庵ゆ。この俵在らん無
 謀ふ似たり最窮屈ぬのべげと姑く戸棚へ躲はる是頼朝の伏木
 隠は漢の高祖の野中の井敵を避る例ぬを。誘とくといそせ現八
 竟ぬ推辞ぬ由と袂包を著る俵ぬ刀を引提身を起し。家庵ぬ都る
 戸棚の中へ左手とひささち登る角太郎も立よと。今夜戸閉く追る人の
 わりゆると俵程ぬ足然りと走著る赤岩牙二郎龍山縁連若黨奴
 隸を後立しと柴門窄しといへく呼門もせ縁類ぬ足踏ひささち登る
 之用太郎ぬ戒刀を腰ぬ跨へ出迎へ。さあ一牙二郎龍山氏とつ立て朝霧日ひて
 とくと訪来らんと故ゆると向へ牙二郎冷笑と兄弟精ぬ聞かゆとも。

親の勘當受る兄貴へ鄙語ぬ他人の權典胡越の如くゆゆを
 訪ふ叶ぬ這回の緊要と、偷児を出しとせぬぬ角太郎ハ其
 方へ膝を推向と、ろろぬ死偷児呼り出せといふ覚ぬぬと、一牙二郎
 項を伸しと又呵々とち笑ひ否宜ぬ隠ぬる跟より人の来るとも
 ちとてこの柴門を推開く裡面へ、を遙ぬ見たり。益る死口を咄んより
 推出しと遞與ぬ異母でも兄弟の好ぬ阿爺へ勘當の勧解しと取
 する法ぬあらん強情張らぬ他人扱ひ用捨ぬ得せぬといふとと声高かぬ
 謹向を縁連要時と推禁ぬ角太郎ぬち對ひと絶と久し死犬村ぬ。其
 這回當地ぬ来つる主君長尾殿の仰を禀し、村兩丸ぬ相似とる短刀の鑿
 定を赤岩大人ぬ請ん為そを携る赤岩の宿所ぬ返當と、一昨宵同所ぬ
 宿を討め、旅客犬飼現八が竊果と走り出るを、某并ぬ塾生連牙二郎

ゆと俱八名推捕籠く撃とせし。彼現八も手煖煉ゆて某が従者なり。尾江内墓内の命を預り。塾生飛伴太微太郎の深癩を負ふ。創まらう。この故小現八を撃手漏り。遺恨の堪む。牙二郎ゆと共侶ゆる。脱さす。追鬼ふ。天を明朝日の升る比。迫る見。現八もこの菴中へ走。入。罪あるの。舎藏事。東門の習俗ゆ。是も非も分ぬ。佛を慈悲善根を。偷児の荷擔せ。佛の教ある。理義を汲。現八を遞與。異議の賢が家搜。捕ら。深念を。決り。心更と。賺ら。威と。老狸。一穴。牙二郎も返答。煙。と。焦燥。然。は。角太郎の騒ぎ。氣色も。麓山生の未歴。話説の。虚実を。奈何。と。ある。う。う。う。偷次。無戒。世尊の妙法。偷見。と。知。舎藏の。不出。家。とい。さ。ある。べ。う。ず。有。如。之。者。件。の。現。八。が。この。柴。門。へ。入り。と。も。脱。路。三。なる。野。中。の。

孤館ある。天明の比。何地。夢ゆ。も。又。外。を。索。ね。ぬ。といふ。慄。立。縁。連。牙。二。郎。争。ひ。ぬ。る。その。術。の。喫。ぬ。論。も。證。据。家。搜。せ。ん。誘。立。ぬ。と。共。侶。の。奥。へ。進。む。を。引。戻。と。立。塞。る。良。人。を。次。貝。る。離。衣。の。尻。戸。の。尻。手。を。み。く。そ。の。白。屋。の。裏。も。返。さ。ぬ。下。地。壁。凌。る。夜。寒。の。床。も。良。人。の。為。一。城。擲。搜。と。見。て。も。その。人。の。を。ら。ず。い。ふ。老。あ。の。ぞ。わ。といふ。角。太。郎。微。笑。ま。離。衣。微。妙。く。ひ。け。る。よ。禁。る。無。礼。を。働。く。弟。を。許。さ。ん。や。事。を。好。ま。ず。昨。宵。の。試。撃。五。人。齊。一。敷。手。伏。ら。れ。る。然。心。を。竊。ぬ。復。さ。ん。と。世。の。盜。賊。の。惡。名。を。負。ま。る。伎。倆。の。浅。ま。る。と。い。ふ。れ。く。駭。く。縁。連。牙。二。郎。敬。馬。と。さ。る。此。の。怯。ま。ず。向。み。ぬ。落。ぶ。語。る。落。さ。る。試。敷。の。の。ち。を。知。る。を。舎。藏。の。疑。ひ。る。先。踏。入。り。引。出。さ。る。者。共。背。門。へ。心。を。ひ。と。示。さ。双。声。勢。ひ。猛。く。ふ。び。進。む。を。角。太。郎。離。衣。も。亦。共。侶。の。前。の。懸。り。

後引の挑争の兄弟夫婦他人の箇に推く春の錦ふ秋延善悪
 邪正の抗織組つ旋の隠口のまをなみよ縁連牙二郎刀の柄のまをうけ
 技放さんとする折ら何の程の昇りて来ぬけん庭の二杖の轎子の裡面より高く
 呼んでやを二牙二郎慄りませを遠東太も大人氣あり且く等ねと禁める声は
 驚く両箇の悪棍彼正の家尊の太人什麼先生といふもみぐくらへ来
 るひえどひろひとをうり猛衣紋掻繕ふ昔の席坐をられ角太郎
 と雜衣の送面をわらうそを引出て迎ける當下赤岩角の綱の長須長袴
 腰の朱鞋の面刀も四下と拂ふ奇物造りの刀を引提立出立居る轎子の
 戸をひらいて出るの是則船虫の綾の袷衣緋の小袖下の籠白無垢の尚
 巳の時身揚袂の所天を次貝く左手虫細小る壺撥抱き共侶の母屋の
 入り上座の著る角太郎離衣の等しく怕る敬ふの縁問もてぞ畏るそ

中ふ牙二郎の意氣揚々と親の身邊へ躰を進め腕を張りてこのひげざり死
 大人も家母もち揃め勤當さる子の宿所へ来ませし所以のやあるとる
 くるくといふ又縁連も先生病中と散せあるとるよくそをくるく来ぬけれ
 御眼痛のむん疼痛いづくひぎぬひ一状と向ふを一角刃かへて昨宵深夜の
 不慮の騷動牙二郎の和殿と俱に彼癡者を追蒐く返壁のくへ走りぬ死と
 告るののあふより瘁の成敗心のとる病苦を忍びていで来たり然るを又船虫が
 路次の往還の覚束あると跡を慕ふこれ亦竹雲を蜚しく今来を彼
 偷見のいふそちと向まき歡が縁連牙二郎辭ひとくさし彼偷見のこの草庵へ
 走り入りを認めぬけれ透さむのへ推蒐しあいうる心あるやんあるト夫婦の
 狎むる舎藏のむとの陳まむとの問ぬる落む語るふ落る言語の中舎藏
 言徴の既ふ頭とてををて某亦家搜をせんとひをあるト夫婦はは聴で



八代傳七郎長三

十五

角

牙二郎 逸東太 雙で角 大郎と詰

角

角

角



八代傳七郎長三

角

角太郎

牙二郎

争ひ果し折る大人の来おせし憚りまゝ要時穿鑿を寛らせり。願ふも
 大人のおん勢ひも彼偷児をわ出さく搦捕せぬわあつ夫婦同類の罪を
 免る致びあつこの議を搦らせぬやと。角歎息して偷児のすゝみ入り
 認めしといふも證據なく又争ふく偷児を舎藏むといふも證據なく角太郎を
 比よるこみ離居しとありても官府へ訴やうと遠絶志するのふあつねが
 今も則し見之角太郎を見ると疑ひ難衣も亦く娘えさる疑ひの解さく
 とも愚老お較そそその弟言礼の違ふその舊友なる義ぬも稱を血氣の
 乗七罵り争ひ送ぬ劍を削るぬ及ぶ理ありといふも科は免ます寔は疎忽と
 いふまのそ彼偷児の有無の愚老が代を穿鑿せん別所要もあるれば龍山生
 赤岩の宿所へ退りて俟ぬ噫無益やと呟けハ牙二郎この残條ぬ寔められ再
 得ぬおあわく傍をええと縁連羞る面色ぬ老先生の教諭の趣感心少

かぬども何とやう角太郎を見負せるか。其安心仕らず彼短刀の
 紛失ある小偷児さふも捕らぬと。還るか主君の咎らぬこの義を憐れんと
 いふを船虫うち消しそその所天の膺すぬ歎められてのるれば身あつと
 謀るあつと赤岩退き吉左右と俟ぬと諭せ縁連推辭ぬ由るか
 貴教ぬ従ひあるか其れ退きぬか件の一議と憑き奉ると期を推し
 一角夫婦牙二郎お別を告ぐ外面へ出で従者をいそぐと縁一町あきり
 従者ホと入るへと箇様々と其れ従者ホと入るを得くそ俣ぬ立別れ
 赤岩のふ趣く縁連要時目送りぬとろ小鞆よ立かろと庵の庭あ
 袖牆の蔭ぬ躲る狐疑邪猜裡面のやをぞ窺ひける。

第六十五回

娘ぬ逼る一角胎を求む
 腹を劈き雛衣鱗を仕せ

飲むとも立地又疼痛去く七日のくその疾愈ん日又とをばるる。○
 けと二三もくとも獲るは菜利るれ姑く捨るゆきふ不測而彼木天其の
 百年のまう土の中埋まけんといふ良材既さるゆふ入るぬ且試小細末めり
 昨宵もく用ひつ時曉くぬ疼痛を覚む痛も大く乾きつりける怪験のあ
 るれば況くその餘の三種を加味し用ひつ眼の故のぞくゆるる絶て疑ひ
 されぬの親の為め命も惜ぢとの孝行に甘く頼む菜種の調達む
 平の貞盛めりその病の良菜はその子の娘の胎内の子を求む例も
 めりこの今昔といふ草子めりえすと曩まゆ人のいふしを不仁の所行を
 めりつものけりつ入る娘のふかきひるつてつと能く孝ゆ子共るつて
 りつものいふ引つた推辞せとと豫くつりつて不便ゆつとつりつ拭み
 虚泪をこもも船虫鼻うらめを喃角太郎は離衣よ凡生と活る物の命を

惜ぬ例のなすその胎内の子も母も養々公の病痾の良菜あるつて孝
 行節義共四孝と名めか唐山人も及んや甚麼る過世の業報ゆ親子と
 生と娘とるつけん痛ぢゆと声空くなまも口説が牙三郎も目をあつてまて喃
 母公のそ大くか泣ぬひその虫を殺さとも大の虫を助けよとの諺もあるれば
 兄貴も嫂ゆもよく諦めく歡ぐそぬぬ人を泣立るれが卻も心弱もるぬぬ
 涙を飲めぬぬと慰められ船虫の顔も赤臉を押拭み親子三人の虚愁嘆ま
 窘らる角太郎の頭を低手と又きく且く心をせざりてを天も仰ぎら数回
 嘆嘆の声も曇りて推辞は由る死大人の御所望只某が人のとるる身を入
 割せつとも惜む死ぬぬとも離衣よも養家の嫡女持め義理ある妻
 るる懐胎もも定まらず倘血塊の類もその功もる狗死るんその義の
 許さるつと推辞を二角のあを眼を瞑し声あり立たまひつて角太郎

親の為は何事と背トとのひーその座もあつて時自程らぬ今の間許諾
 るを忘と欲と敦圍猛く詰らる角太郎の牌を進めその義を忘とのひも
 仰もるふよる泣の秋一旦傷と下れ目の葉は娘と孫とを殺しぬ誰不仁と
 いづる死且離衣が懐胎の糸を不否や定るぬその腹を今裁と懐胎さ
 るふとく不仁の後悔其甲斐あつてと父争ふ子あつて死にその身不義の階ら
 ざとの聖の教のいふ禁めやうせ親の為賢慮を仰ぎ奉るといふ一角
 まま怒りて一言の言返りて青標紙を引博士貞さま不孝の心とを
 親を欺く當座の誓言言ひつて破る妻との惜まられ又何多し今良某の
 有る目、目の痍愈む左の敵を討つと竟に稱せし武術は是より大く劣る
 長生は恥しと鄙語をひ合し今面り自自殺しと汝も夫婦が心を
 休んてとひひと衣領推ひき脇挿の刃を抜んとする程は吐嗟と駭く

角太郎が禁るをせし船虫牙二郎も左右より携着とせし刀を奪はる
 船虫の恨し角太郎を討つと賽孝行の剥易く醫師の正し懐胎
 と欺る現口を世の中朝勝るものへと親を死しをも身何
 とも必死の心つと怨むれは牙二郎も亦声を奇立と兄貴の孝子といはるも
 嫂の貞女といはるも今この答一箇あり尻口でのひきまらるやいふ
 ぞとせし嘔吐られ弱り果る角太郎のひも黙然たる良人の心を
 必し汲む離衣の初より涙の痛める苦し死胸の塞つてのひもあつ
 され只伏沈むるをせし絶えぬ涙を飲り頭を擡て嗚り天
 あれ程も是具はるなりや妾が有身は扶否を定るせれども竟に脱しぬ
 定業と覚期究む侍るか身覚る中脱の病病過も先陰共侶

かゝ腫張るるのゆれが疑るるも無理なる多々公の為ふ今この中院を割る後
 きもせよえぬ内物物の有るを定ふ知られぬ濡衣を乾せりわづ蜻蛉の
 命をいへる惜むを元本望まじうも悲し死へ天見つ山の山雞の峯上
 隔るる光明一泣暮らや多願ひ慥々姉と伎の二処に住むる昨けり別れ
 後の憂事と黄楊の小櫛の告る向むる死せうまうんといひける髪髪
 神をぬ身も是非も死にゆく欲きまのいの盡さぬ言の葉の春ぬぬ
 花知るる身の果の哀れを浮世の秋の露もれ籬の菊のさく毎ふ
 出さぬのみ只一遍の手向草受り待ん後の世の蓮の甚法の雲半座を以て
 侍る一願ふ百年の命を名をも揚家と起て孝と義の人の鑑とあり
 死に栄あるこの身の幸ひとて殺しぬと身を衝つし烈女の魂悍く見え
 目小餘る涙を遣る顔あまはる角太郎は生くと彼つ眼ををまらさき離衣

微妙き覺期えともかくも脱とて死命運ちんと後ども死身の親へ
 養父只一とりの縁ふれを養父へ則ち伯父中幼稚き時より字育也文
 学武藝何れも教導き人となり只一箇の愛女を妻せり一洪恩を實
 父の為とひきり仇と復さ人とのんやこれ一切せぬあまを推辞と立
 難うと離衣を履近つ死す小宣ふ妻をの惜むといふは公の喃母御前
 牙二郎ぬいふ甲斐も死す所天を任し時を殺さんりて手ぬみりて
 公の某の所用ふ立させぬとふ小領へ船虫牙二郎虚々死目を押しひき噫
 わづる雄々死孝烈いと痛く哀れを又俺們的に今さら刃を當られ
 喃母所天家尊の大人いふ相謀ちうえやと向ふ一角含笑と連愛は死女子女
 嚮小示せり木天斐丸の鞋へ推させ末より大抵用ひ盡しはれも真木へ柄ぬ
 わり便是良削る直秘藏と携来たりこの短刀をの離衣ぬ自殺を勧めよ

如右まると死の自業自滅といふくつと娘を害する誠もろく妻を殺す恨も
 めんどまやこの意を得さずといひつ懐子をいれまうと出た短刀の異聲合
 せし依るをいざとやまう寄れば船虫鮎く受とて離衣が身邊の措け
 喃媳御前杖の下立つ振子に打とつた親心あし身の覚期の健氣さ誰と當ん
 刃はるよつて自殺を勧めよとある尊々公の仰黙止るこの短刀をおろす心あつふ
 臨終の弥陀の名號肝要るんと虚泣く説示せ離衣の短刀を揚ぐら戴冠
 脆き女の腕の潔く死を遂んと心のとまゆまも然りとて妾も武士の妻武
 士の女兒を生と一甲斐の後とそめひ侍と尊々公母御前より世を松竹と
 共侶の御壽命長くまを名残の書ねて天のあまのあまうて御心の遺さへも
 わらうとるを猜しぬくさぶとをう投放り刀の光やふ角太郎のそまえ膝を
 推向くちも目成まが降を膝ま涙の玉のれ宵の板屋の妻丈夫送み顔を見

あつて其の無言の告別もくせまやと角が焦燥声の冥官の使の似たる阿鼻
 泥黎外弘誓言の船虫も牙二郎も亦とくと死天と促と無常の首途後とせと
 離衣と握持の侍の間み男一を刃の電光刀尖深く乳の下へまを衝立と引
 繞らせ颯と漬る鮮血と共の頭と出る二箇の靈玉勢ひさる鳥銃の火蓋を切て
 放せし如前面の半と角が鳩尾骨破と打碎けが苦と一聲叫びも果て手足を
 張るぞ止はける縛の不測の船虫牙二郎驚きまう見えりてつて天の撃と
 ろひぬ大人の縛絶ゆる状悖逆不孝の角太郎妻離衣と謀し合し親を害
 する人面獸心其知る動きそと呼みと敷んと進む牙二郎を資と引添船虫も
 等し懐劍技閃くま面を振るま殺す鬼と角太郎の戒刀を撃るま握持と
 受流しちら拂ひ慄とあふるいふのわら某夫婦いふと親を害す悪心あらんや
 等也と禁めても些も聴ぬ無法の大方風禦ぐのさる角太郎の右の臂と一寸許

かきり 庚負の右の柱え左の當る期の重厄最も危く見え折る戸棚の紙戸の
間より打出せ鉄鏡を牙二郎の乳の下にす肯腐くさすち串を叫苦と叫ぶ戸と
共刃と捨てぞ仆はける程もあむぞ現八も食戸破と蹴放ち棚より擡と飛下
る船虫の如く驚駭驟く進んたまど外もあむぞ現八も走懸り七利手を捕て引
被さ向ふふ投へ船虫の火盆の稜の膽を大く打惱ますく灰の塗まて倒れけり
角太郎のこの為体小且駭き且怒りも無益一死大飼現八人も頼ぬ助大刀の刃を不
孝小溜さえ為飲れ豈弟と継母を害して身を脱るのろくや交遊の義も親
族の然ぬ易くてこく勝負を決せよと敦圀猛く名告る戒刀晃ると引抜く
聲投捨くち揚る刃の下と現八も搔潜る捕箇る角太郎の腕を流る鮮
血を乞と見と遠く懐く出と觸膝の露る鮮血の吸入如く塗着て厚みはく
水小等しく只一滴も觸膝く下み溢る親子の明証奇特の勇現八も怒るぞ

声とあり立ち慄る大村め打仆さす一角の御邊の真の親るまこの觸
體を真の父赤岩一角武遠大人の白骨るまらざるや今面も白骨と血と
ひらぬ疑り親子の徴据告るるの言る小怒を刃と俱ぬ飲めくよりせれと
突放せ角太郎の必ひらる兒奇特を疑ひの鮮ねも勢ひ折け折
布く膝ぬ戒刀の柄押さく由断せまらるるざり大飼め彼ぬ小けまらる父と父
るまどいさるるさるる所以せまらるると問へ現八歎息と倚稀る孝子
烈女も妖怪の為に欺まらるるも累る厄難ぬ離衣の自殺より腹の中より
頭まける彼靈玉小假一角の繫糸小され天の冥罰彼の御邊の父るる歯牙
二郎も亦弟ぬあむと遇妖怪の胤ふと船虫の妖怪小列漆小妻といふ此の三三の
来歴一朝ぬ盡さくつゝぬらぬも般系まきまき所要を摘ん抑一昨時ぬ甘本細
芋と過ると里の茶店子憩ひ茶店のあるト鴉平が向むがら御邊親子の



一角

牙二郎

南次郎

三浦

船虫

八天傳七車卷二

三浦

和殿を知りて瘻を肩ひらふも不用意に依てと緯詳に告られ某頼る駭嘆
 一七命が御邊へ何のぞと向ふ彼人又答くこれに足陽人なむ赤岩一角武遠が
 亡魂の假見と出ると今茲より十のまり六七十年の冬十月の比より某茂
 起さるうありて昔より人のかうぬ庚申山小登らんと門人幾三四名を將て未明
 程の登降する程の第二の石橋の邊に至り怖れをこぼし渡るのふこの故に某一人
 橋を渡りてこの岩崖の邊に来つ時山風猛ゆ勢りて沙石を眼を撲りて弓を投
 捨て目を拭ひて後小窺ふ件の山猫驚直走り鬼を引倒さんとする程に
 腰刀を引抜き吭を刺んとしれども腕狂く山猫の前足を劈り小瘻瘻されば
 物も付手勢ひ籠ぐ某が吭の啖著るが雲霧時めあて緯断とて死骸を岩
 崖に引入れ穴を啖ひ骨を遺し軀も某が衣裳を被り某が大刀を佩き相
 貌言語進止まなく某が似く変じく如此如此と欺詐する次の日赤岩小

かろ来ぬれば門人里人いささう後妻窓井を欺まると一言も疑ふのふ
 かくその次の年窓井が腹小男児産まると牙三郎と名つけり是よりして假一角の
 某が子の角太郎を憎む甚しく日毎の呵責断ちけり外伯父をける大
 村の郷土犬村蟹守儀清丈婦角太郎を憐れ養ひて教導き近曾獨
 女を離衣をきて妻を是より先の後妻窓井へ妖邪の精氣を吸耗して病
 正久しきまをすあかす假一角の嬖妾をの三物に近曾来る嬖妾の
 船虫といふのを後妻執立りて彼船虫の心さる邪智奸悪の淫婦なれば同氣か
 ら相求るゆゑ妖邪の觸るる恙なく又大村の蟹守丈婦へち續き世を断り
 一々遺財田園を利せし為に船虫が欺詐する角太夫婦を石とつ箇様々の口を
 起す離衣の離別せし角太郎の亦追出さる今返壁る庵のあり假一角の
 幾回とる角太郎を害せしを怨みて天とるぬ角太郎の身を護る礼守自生の靈

玉あり身ふ又如此々々の恙之あまは僅小害を脱するもその危きと雞蛋を裏ね
 する小異をちと和殿返壁小赴き角太郎小對面と渠を資けてさ為小假一角
 小を撃果して寤を雪めぬうといふも哀れ頼ま某感涙を方もま御邊り
 まま靈あまは枕立夢は見え縹の趣云云とてその子小告さると詰まぬ
 けれ尊父の靈魂いと恥る面色めてこれごとそのるれ後妻窓井が在り比を如右
 夢ぬあねねの妻の目か見の只管小假一角を真の良人真の父と夢人をいふや
 夢ぬ入る告るともいつて實更と夢ぬ只疑ひを起すの彼ホといふ危うか
 と深念をり黙止う和殿返壁小赴き角太郎小對面とともすまのちと
 且く筒様々々小談一更真偽をうと踏ると角太郎が迷ひを解くは短刀あり
 短刀ありこれに是當初彼山猫が畧遺とてこの岩窟へ残し置る某が短刀あり
 らて今小秘藏せりあれども角太郎この短刀を認めるとるも疑ひ解くは

觸躰あふあを彼が鮮血をこれ瀧ぐ親子の微据分明るん只願憑むとか死口
 説く觸躰と短刀を遞与されりかくその曉立別れとて免靈魂四言十四句の
 識詞を吟し示されり某記憶されどもその折必解かざるを今さるべき的
 如く當らむといふとるこれその詞小相遭講武相別誘仇といふ起句あり是
 則きの某へ訪来て御邊と武更を討論し介后又某へ赤岩へ赴きを才三郎船
 虫假一角を追ひつて来るといふ又その次小越全露王菊花謝秋といふ両句小雛
 衣あをを露玉に則礼字の灵玉烈女これを全と謝秋のその死をいふ又その
 次小再阨不釋更問觸躰といふ二句あり是目今の事小とて小主客の再阨も觸
 躰よりて安る又その次小妖邪亡去山忘遊といふ兩句あり是此假一角の山
 猫亡びて庚申山小妖邪絶う是より衆人登山を浴べといふ又その次小八犬具足八犬
 未周窮達有命離合勿謀南總雖遠終歸一流といふ六句あり

きの告る義兄弟犬塚大川犬山犬大江ホ五犬の人々御邊と某と俱七名皆
 是安房の里見殿の因縁あるをうの緯の濫觴を原る小里見殿の息女伏姫君一三の
 信を失うて八房といふ大俱して富山の奥入りぬゆゆ彼犬の氣を感して腹を
 よめりぬひを懐胎ぬゆゆ愁ひき自殺せんと覺期の折里見の忠臣金碗大
 輔彼八房を撃斃せて鳥銃の鉄丸抜き姫も痛を負ひぬゆゆ刃伏一
 ぬひの瘡口を白氣升りて八方散乱し且役行者も感得せられ水晶の
 数珠の数々の大玉八箇も共散乱して往方とあつて件の大仁義礼智忠信
 孝悌の八箇の文字の自然に見ゆのゆゆか金碗生れ出家の件の大玉を
 とし料敷行脚の年を歴り加旃里見の家臣延虫崎十一郎照文も主君の密
 意を禀奉りて金碗入道の迹を慕ひ智勇の賢士を募らん為渠も諸國を
 遊歴し金碗、大法師と共下總を行徳の旅宿せ折某ホゆゆ大

照文の對面し里見殿の因縁ある趣を感悟せりその因縁をいふゆゆ俺們
 七名幼稚き時と仁義礼忠信孝悌の文字わられる灵王を感得せり便是
 件の數珠の數々の玉と文字よりて分明之又只是のゆゆとて吾黨七名
 各々その身の中丹丹似たる痣ある彼八房の犬の毛色を類せを知るべ死の如
 之者各々親めりとも皆伏姫のめ子等一曩安房へ伴んと照文の勸めけと
 八人の具足せられ推辭くその議に従ふを折る不慮の厄難起りて大江親兵衛の
 往方を知りて犬塚大田某ホハ、大照文の相別して大川莊助と共侶ゆ上毛荒芽
 山に至りては彼知ぬも亦災害起りて犬山犬塚犬田犬川の四大士別れし
 巡りてこの地に至りてか智智字の玉をのて大士をゆゆいも遇ふを得ざるを
 のて八犬末周と彼詞句を示されし八犬具足して安房ゆ至りて里見家ゆ
 仕るよと示されし南總雖遠終歸一流の向ゆり因縁かぬの如くされば彼靈

魂の頼もむとも某既御邊を以て大士の入るんを知りて死力を竭さんとして
 縛の及ぶ及ぶ入りておの山の猫の通力自由を得りて彼の灵玉の怖る故ゆ年
 来御邊を害せんと欲せし且昨宵弟子が某と試撃せし折その身の病痾も假
 托と某と試撃せし夜深くと又彼悪棍も某を害せんとする折假一角の出づりし
 懐中の信字の灵玉の怖るる然れども離衣の吞る玉の腹中小あるしを
 のぞきし懐胎の胎内の子を求るとその灵玉の撲けしは是天罰の
 時即到来その数もあつて又その縁連も携来する短刀の柄も
 鞋も木天蓼のやわいふ假一角が竊畧も某の用ひるる某と賊と誣り木天
 蓼のやわいふ猫のよむのやわいふ薄荷銅粉子の粉と共究めてこれ妙某然るを醫
 師の云ふと虚言するん但山猫と唱るもの又是一種の妖獸也人家の猫と
 同くは大小の者も猛まて虎め似し深山の罅に好みて人家の小児を

竊と啖ふとありと况況數百歳を壁するの通力変化さそのゆりかほは妖
 怪の腕婦人の斃され御邊夫婦の孝友貞烈人の徳をの義を神明佛
 陀の憐助を仇を復さるるん恰といひ恰といひ唯痛疾の離衣とんその心操
 賢明と徳も良人子孫の長くを非命の終つる唯薄命といひ
 名を揚げ良人を資ける貞烈未世の傳ふ及ぶ亦洪運といひは伏禍福の
 糾の羅の如し誰か奇伏を前知せ死抑むらにの趣を初る告げり御邊の信
 かつらんと彼妖怪を知らずと彼のやせんと必ん今を渡与を尊父の短刀
 觸躓と俱に受納めんとといひみま像見の兩種さうと且角太郎愕然と初て
 夢の覚るごとく且驚き且恥す處へ戒刀の鞘を揚ぐ斂る手首を戦
 さまぬ感涙さるる泉の如く胸を拍胸を拍く懐舊悲歎の堪ざりけり

里見八犬傳第七輯卷之二終



七編七卷

松野

松野院

二